〈実践報告〉

「授業力」の向上を目指した大学生による学習支援活動

― 厚田中学校における家庭科の授業を視点として ―

伊　井　義　人（藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 教授）
中　村　伸　次（石狩市立厚田中学校 教頭）
西　川　絵　梨（石狩市立厚田中学校 講師）
田　中　萌　々（藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生）
長　野　祐　果（藤女子大学 人間生活学部 人間生活学科 学生）

本稿では、2014 年度に石狩市立厚田中学校で実施された藤女子大学学生による学習支援活動を振り返る。今回は、特に本学三年生が実施した家庭科授業での支援に焦点を当てて、授業者本人、中学校での指導教員、後輩学生の「振り返り」を掲載し、次年度の活動の参考としたい。

また、この場をお借りして、本稿で報告する学習支援活動を支えてくださっている石狩市教育委員会および厚田中学校の皆さんには御礼申し上げたい。

キーワード：学習支援、授業力、厚田中学校

はじめに

2011 年度から開始された石狩市立厚田中学校での藤女子大学（以下、本学と略）学生による学習支援は、2014 年度で四年目を迎えた。これまでも筆者らは、毎年、報告書を通して各年度の現状や課題、そしてそれ以降の将来像を提示してきた[1]。本稿は、厚田中学校における学生による学習支援の報告書として四報目となる。

本報告書では、本年度の活動の中でも、特に 2015 年 10 月下旬に実施した学部学生による中学生への家庭科授業の取り組みに焦点をあてる。具体的には、① 2014 年度の学習支援活動の概要を説明し、②家庭科授業の取り組みについて、学生および中学校の指導教員、後輩学生の感想を記し、最後に③中学校側、大学側からの 2014 年度の活動の総括および次年度に向けての展望を整理する。

1．2014 年度の活動の概要

本年度は、計 10 回の学習支援活動を行った。その日程は、① 5 月 26 日（月）、② 6 月 16 日（月）、③ 7 月 7 日（月）、④ 8 月 19 日（火）、⑤ 8 月 20 日（水）、⑥ 9 月 1 日（月）、⑦ 10 月 20 日（月）、⑧ 10 月 27 日（月）、⑨ 1 月 20 日（火）、⑩ 1 月 21 日（水）である。これに加え、⑪ 3 月 13 日（金）には卒業式にも出席した。

これら 11 回の訪問では、数学での学習支援を主な活動としている。昨年度までの学習支援の主担当であった数学教諭が、2013 年度で転出したため、今年度は新しく赴任された松本教諭が担当することとなった。この数学の学習支援については、事前に参加学生の代表と松本教諭がメールやファックス等で連絡を取り合っていた。

また、今回は月曜日の実施が多かったが、これは参加学生の講義が空いている時間帯というだけではなく、厚田中学校の家庭科担当教員（本学人間生活学科卒業生）の授業が、この日の午前中に組まれていたことも理由としてある。そのため、学生たちは、数学の授業で学習支援をした後、家庭科の授業を見学し、時間的な余裕がある場合には給食をクラスの中に入って、一緒に食べ、大学に戻るという一連の流れをとっていた。

加えて、大学および中学校の夏季休暇中（④・⑤の日程）には、通常の学習支援に加えて、中学生との交

流会を実施した。例年、女子バレーボール部や野球部の補助とともに、文化部との交流も恒例行事となってきた。文化部との交流では、これまでも調理実習やキャンドルの作成などを行ってきた。

2014 年度は、キーマカレーとナン、メロンプリンを中学生と調理した。特にメロンプリンを調理する材料調達には、中学校とも関わりが深いメロン農家にご協力いただくことができた。調理したものは、生徒・教職員・参加学生全員で食べた。また、当日は学生が 5 名参加したが、今回は食物栄養学科の四年生も中学生との調理実習に加わった。栄養教諭を志望する食物栄養学科の学生は、三年次に小学校で実習をするため、中学生との交流の機会は少ない。そのため、栄養教諭を目指す彼女にとっても有意義な経験となったと考える[2)]。

今回は、初めて「さざなみ会館」に学生たちは宿泊した。これまでは、地元の旅館や小中学校の管理職の方々の自宅に宿泊してきた。高齢者のレクリエーション施設である「さざなみ会館」は、宿泊費も一泊 3,000 円（全員分）と安価で、風呂場も完備されており、1 月に合格祈願餅つき大会に参加した際も宿泊することとなった。

また、例年通り、8 月 19 日の夜は中学校教員との懇親会も開催され、さざなみ会館の外でバーベキューをしながら様々な情報交換をすることができた。このような懇親会は 1 月の宿泊の際も開かれた。さらに、8 月 20 日の学習支援の終了後には、浜益まで足を伸ばし、支所の地域振興課の協力を得て、地元のピーマン農家・花卉農家を訪問することができた。

2015 年 1 月には、合格祈願餅つき大会の前日仕込みを保護者と行った。その際、毎年、仕込みを行っている保護者から「藤女子大学も今年で何年目？」との言葉をかけられ、学習支援のこれまでの継続性を再確認するきっかけをいただいた。

学習支援とは異なるが、3 月には学生三名が卒業式に参加した。彼女たちにとっては、久しぶりの卒業式であり、その学校行事の重要性を改めて感じることとなった。また、式の終了後には、中学校三年生の最後の学級会活動にも参加させてもらったようである。

2．学生による家庭科授業の展開

本節では、実際に家庭科授業と担当した学生本人が、実際の自分の授業を振り返ってもらう。授業者である田中萌々さんは、大学三年生であるが教職課程を履修する学生とは少し異なった経緯をもつ。通常、教職課程履修者は、毎学年、継続的に「教科に関する科目」「教職に関する科目」を履修していく。しかし、彼女は一年次には他の学生と同様に、上記の科目をとっていたが、二年次には履修していない。そして、三年次から、下級学年の配当の科目も含めて、教職課程を再度履修したという経緯をもつ。それは結果として、同学年の学生よりも多くの家庭科関連の講義を三年次に履修することとなった。また、彼女にとっては、時間的にも、精神的にも厳しいスケジュールだったことが予想されるが、教職課程を遅れて履修しただけ、田中さんの家庭科教員への「思い」も強かったといえよう。そんな田中さんが、どのような気持ちを抱きながら厚田中学校での家庭科学習支援に望んでいったのかを以下に記してもらう。

(1) 授業の準備と経緯

私は、2014 年 10 月 27 日に厚田中学校で家庭科の授業をさせていただいた。毎年恒例になりつつあるこの取り組みは、藤女子大学と厚田中学校の交流の証として根付いている。

私は今回授業をするにあたって、今まで経験したことのない多くの壁に幾度もぶつかった。まず、今まで模擬授業を大学の講義で 1 回しかしたことがなかった私にとって、「本物」の中学生相手にきちんと授業がで

写真 1　文化部の生徒との記念撮影

写真 2　浜益の花卉農家

きるのか不安で仕方なかった。指導案の書き方もままならない状態からのスタートだったので、今振り返ると本当に多くの人に支えられて達成できたことだと思う。

私が授業を担当したのは食分野の「栄養素の種類と働きを知ろう」（新しい技術・家庭、東京書籍）という単元で、五大栄養素の働きを理解したうえでバランス良い食事をするよう心がけようという目標で進めていった。しかし五大栄養素の働きとバランスが摂れた食生活が大切であるということがどう工夫すれば、わかりやすく伝わるのかということがわからず心の底から悩む日々が続いた。毎日毎日、このことを考えていた。

そして、ある日、ふと栄養素を「擬人化」して考えたら親しみやすくて興味を示してもらえるのではないかと思った。そこで私は軍手の指の部分で人形を作り、それをそれぞれの栄養素に当てはめて役を作り、その栄養素・指人形たちにセリフを与え、それを iPad で録画をして編集をした。その際、母に協力してもらい動画を作成したが、その作品は彼女の圧倒的な演技力で、かなり素敵な仕上がりとなったので今後の私の作品には、度々登場してもらうことになりそうだ。そしてその動画を使って、ワークシートに穴埋めをしてもらう形式にした。大学の先輩でもある西川先生や伊井教授や厚田中学校の校長先生、教頭先生にみてもらい試行錯誤しながら教材をみがいていった。2014 年 10 月 20 日には、実際に模擬授業も厚田中学校で行い、先生方にもコメントをいただいた。練習を重ねていくことで、ひとつひとつ出来ることが増えていったことは自分の強味であると感じ、自信につながっていった。

そして本番、使う教材を忘れてしまうというハプニングもありドタバタであったが、緊張しながらもしっかり練習の成果を出せたのでほっとしたのを覚えている。授業後、先生方に激励され指導していただき、とても贅沢な体験であることを身に染みて強く感じた。

指導案さえ書くことがままならなかった状態の私がこの取り組みを通して、学んだことは目には見えないが、おそろしいくらい大きなものであると感じる。毎日悩んで悩んで悩んで、やり直して考えてまたやり直して、それでもうまくいかなくて、嫌になってしまうくらい苦しんだ１か月だったので、諦めずめげずに最後までやり遂げられたということは自分の財産となったと確信している。今回の経験は、わたしの始まったばかりの教師人生の中においても大きな経験であり、田中萌々の人生の中でもターニングポイントとなったと思う。

⑵　授業（準備）から学んだこと

今回の経験で学んだことは大きく分けて、①視覚教材の有効的な使い方、②生徒に自由に発言させることの大切さと難しさ、③「教える」ことは自分の思っている以上に知識が必要であること、であった。

①については上記で述べたが、今回授業で iPad を使用して動画を作成した。生徒たちに興味を抱かせることはできたが、「動き」が何もない動画であったために、動きで魅せるという最大の動画の利点を生かすことができなかった。また同時にワークシートを記入する形態をとったために、動画に集中することがなく終わってしまった。この反省から、動画を作成する際はある程度動きがあり、物語性のある伏線の張ったもので仕込むとよいのではないかと感じた。また同時に作業することなく視聴後に、みんなで答えを出し合っていくスタイルにすると動画に集中できるのではないかと反省から学びとることができた。

②では、わたしは当初何回かの授業の練習の中で、思いがけない返答が来たらどうしようと思い、生徒の発言を自分のほしい返答になるように答えが限定されるような問いかけばかり考えていた。しかし、そればかりでは一方的かつ自分本位な授業になって、生徒にとって「つまらない授業」と言わんばかりのものだったので、失敗から学んだことは生徒には自由に発言させながら、自分のねらいに引き込ませるよう多角面から介入できる様々な知識を仕入れる必要があると感じた。

③は、今回授業をさせていただき一番身に染みて学ぶことができた。今までは自分がわかることは必ず全て教えることができると思っていた。しかし授業をつくっていく中、自分で納得しているつもりの知識は定義にしかすぎず、その道理を知らないためになぜという疑問に答えられなかったり、自分の表現の仕方では正しく伝わらなかったり「教える」というハードルの高さに唖然とした。「教える」ことは自分の発言になぜそうなるかと問いかけて知識を自分のものにすることでなされることだと身に染みて学んだ。

⑶　大学での模擬授業との違い

大学では、中等家庭科教育法や教育実習などの講義や演習などを通して、大学生相手の模擬授業を経験してきた。しかし、大人向けという言い方は正しいかわからないが、今までは対大学生や対先生であったために、自分がわかる説明で伝わると思っていた。しかし今回、中学一年生に教えるという機会から、自分の視点からだけではなくその年代の視点を持ち合わせる必要があると感じた。

写真 3　家庭科の授業風景

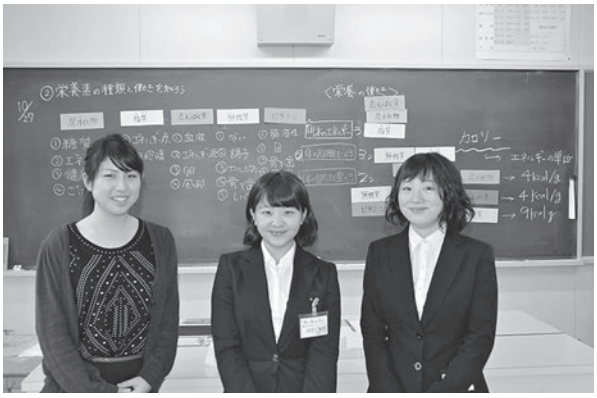

写真 4　授業後の記念撮影

そして、大学での模擬授業と一番違うと感じたことはその場の雰囲気だ。大学生はどうしても観察者というスタンスが抜けないので、純粋に学ぼうとしている中学生の雰囲気は初めて味わい、それはうれしくもあり、怖くもあり、責任をすごく感じた。生徒を目の前に授業する意味はこのようなドライブ（臨場）感を共有しながら学びあうことができることかなと思った。

また、教育実習の前にこのような取り組みを行うことは「教える」ということに正面から向き合う機会となり、さらに「教える」ことに研きをかけていきたいという気持ちが強くなった。その中で、至らない私に多くの先生方が熱心に指導してくださったことは大きな自信となり、それを糧に頑張ろうという気持ちがわいてくる。その中でも中村教頭先生に指導していただいた「生徒の生活に沿った授業の大切さ」というのは、文字の説明ばかりで本来の目標を見失いがちだったわたしには大きく響いた。特に家庭科は学んだ知識を生活に生かせるようになって初めて、授業がうまくいったという部分があるので常に念頭に置いていようと思った。

⑷　これからの課題

2015 年 5 月に教育実習が控えているが今回の経験で、それまでに必要だと感じたことは、「知識を多方面から増やすこと」「教材研究を惜しまずに行うこと」「リラックスできる話し方・自分の気持ちをコントロールする技術を身につけていくこと」である。

専門の勉強はもちろん新聞を読んだり、有識者の話をきいたりして、知識を増やしていきたい。教材研究では、授業で見えない目標を設定しそれをどう伝えるべきかを考え研いていくことに努め、本番でリラックスできるように緊張する場面を増やしそこでの対処を経験から身に付けるということを行っていきたいと思う。

これからつらく厳しくそして険しいことがたくさん待っているが、私は「経験を前向きに！　失敗をプラスに！」というスローガンを掲げて何事にも挑んでいこうと思う。経験は何よりの自信につながり、失敗は何よりの勇気につながると感じた。そして今回このような貴重な経験から失敗したことでたくさんの自信と勇気をいただいた。抽象的な文だが、これが今の私にとって大切なことであり課題であると感じていることだ。それを胸に今後も切磋琢磨していきたい。

最後に、今回の取り組みに協力してくださった全ての方々に今一度心からの感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

（以上、田中萌々）

3．厚田中学校家庭科講師（藤女子大学卒業生）による家庭科授業の指導

本節では、田中さんの授業への指導に関する感想を、厚田中学校の家庭科教諭である西川先生に書いてもらった。彼女は、昨年度まで学生として学習支援に参加していた本学の卒業生でもある。西川先生には、これまでの自身の学習支援の経緯を踏まえながら、田中さんの授業への指導を振り返ってもらった。

⑴　これまでの経緯

厚田中学校における SAT の活動は、2011 年度よりスタートしており、当時大学二年生であった私は、学生として月 1 度の学習支援を行ってきた。三年間、学生の立場から厚田中学校を見つめ、生徒・先生方・保護者の方々と交流を深めてきた。また、今回田中さんが行った家庭科授業を私自身も二年次に経験している。

2014 年度は、厚田中学校で家庭科の時間講師として勤務することとなった[3)]。そのような背景から、今回の家庭科授業では、田中さんの授業づくりにおいて、力不足ながら指導をさせていただいた。これまでの学生

SAT とは異なる立場でこの活動に参加し感じたことをここに記載する。

⑵　田中さんの授業実践

今回、田中さんには食分野の「五大栄養素のはたらき」について授業をしてもらった。実践にあたり、彼女の何度も指導案を作成し教材研究を繰り返す熱心さ、授業に対する真摯な姿勢に感心した。また、使用教材にも工夫がみられ、自作の動画やキャラクターを用いた栄養素の表現方法は、私自身も学ぶ点が多かった。

何度か模擬授業を繰り返し、伊井教授とともに助言をするうちにみるみる成長していく彼女を見て、刺激を受けたのも事実である。実際に模擬授業を見た際に指導した点は、授業内容に関することと、授業をすすめる際に工夫すべき点についてである。具体的に以下の五点を助言した。

・資料の工夫（プリント作成に関する工夫、資料提示と説明の順序に関する工夫）
・生徒の活動に要する時間配分
・指示だしを明確さ（プリントに記入してください、動画を見てください、など）
・生徒とのやり取りを大切さ（一方的に話すのではなく、生徒の活動を意識する）
・笑顔で大きい声で自信をもって話し、教室全体に視線をむける

資料作成において、プリントではどのような語群を用意するのか、プリント内の括弧のサイズや生徒が記入する数は適切か、後日資料を振り返った際に、しっかり生徒が習ったことをまとめることができるかといった点である。また、こちら（教員）が想定しているよりも生徒は記入に時間がかかったり、一度の説明では理解しきれないこともあるため、実際に授業を行ってみないとわからない時間配分について助言した。そして、何時間もかけて教材研究を繰り返すと、生徒に伝えたい情報ばかりが先行してしまい一方的なものになってしまう。そうではなくて、生徒が何を感じ何に気づいたか、その声に耳を傾けることが大切であることから生徒とのやりとりを積極的におこなうこと、自信をもって生徒と接してほしいということを伝えた。

このようにして他者の授業を、指導する立場から見ると私自身の授業の進め方や教材研究への姿勢、今後工夫すべき点について改めて気づいたことが多くあった。田中さんへの指導を通して私自身が学んだことは以下の五点である。

・練習を重ね、生徒にとってよりよい授業づくりをすることの大切さ
・プリント、動画、写真などの教材を多角的に提示することで生徒はより関心をもつこと
・授業は、教員の問いかけと生徒の思考や発言で成り立っているため、どんなに練習しても予想外の返事が返ってくることがある（即興性の大切さ）
・教員の醸し出す雰囲気が、生徒にも伝染する

なにより、田中さんは教材研究を怠ることなく、知識を増やし資料に工夫を凝らすことを最後まで熱心に行った。模擬授業を 3 回見学したが、こちらの様々な質問にも動じることなく落ち着いて答えてくれた。その際、メモを読み上げるのではなく頭の中にある知識としてスムーズに提示する姿には、彼女の影の努力がみられ非常に感心したのと同時に、私自身も見習うべき点であると強く感じた。

また、模擬授業では私と伊井教授が生徒役を演じたが、実際に中学生を相手にすると予想もしない返答が返ってくることがある。そのときに、生徒の発言をまずは受け入れたうえで、ねらいとしている答えに持ち込むことの難しさを再認識した。そして、田中さんの授業を通じて一番に感じたことは、教員の持つ雰囲気が生徒や授業に伝染するということである。彼女のもつ柔らかな雰囲気と口調につつまれ、生徒も心地よく授業を受けていた。生徒が気持ちよく授業に参加し、積極的に発言できる仕掛けとなっていたことから、雰囲気づくりも授業において必要不可欠であることを改めて学んだ。

このように、田中さんの授業実践を指導者の立場からみて感じたことを記してみると、私自身の学びがいかに多かったかということに気が付いた。他者に意見してみて改めて気づくことも多く、その後の自分の授業にフィードバックすることができた。

⑶　厚田中学校で学んだこと

学生時代の三年間（二～四年次）、SAT の学生として厚田中学校を訪問してきた。数学の支援に入り、計算のサポートをしたり丸付けをしたり、一緒に給食を食べて生徒や先生方と交流を深めた。夏休みには部活動交流、厚中文化祭では有志発表にも参加し、保護者の方々や地域の方々にも SAT の活動をより身近に感じていただけたように思う。

学生のうちから現場に触れ、現職の先生方の授業を拝見でき、生徒と触れ合うことができる厚田 SAT と

いう活動は、教員を志願している学生にとってめったに出会えない好機である。授業の進め方や工夫点、生徒との関わり方、生徒への助言の難しさなどたくさんのことを学んだ。

ご縁があり、大学を卒業後も時間講師として厚田中学校に通うこととなり、それまで以上に生徒や先生方と深い関わりが持てたのと同時に、より実践的な学びをもたらしてくれた。試験の作成、評価の付け方、学校行事を学校全体で作り上げること、先生方の連携によって学校が成り立っていること、筆記は苦手でも被服や調理実習が得意な生徒がいること、委員会や部活動に所属し役割が与えられることで責任感をもてるようになること、先生方は常に、生徒に対して目と耳と心を向けながら接していることなど、数えきれないほど多くの事を厚田中学校で学んだ。これまでの四年間の経験と学びは、今後の教員生活への糧となると確信している。

これまで四年間、立場を変えながらも厚田中学校に関わることが出来たことを大変うれしく思う。先生方が明るく受け入れてくださり、職員室に机が用意されていた時の喜びを今でも思い出す。未熟ながら、生徒と向き合って、先生方や生徒に支えられ試行錯誤しながら授業をしてきたこの一年間は、学びの連続であった。今年（2014 年度）の 3 月に卒業した生徒達は、三年前に入学式にも出席させていただいたため、彼らの中学校生活をまるごと三年間見届けたことになる。厚田 SAT の歴史を感じる瞬間に立ち会い、感慨深い時間であった。厚田 SAT、家庭科の時間講師として学んだことを自分の自信にかえて今後も教員として教壇に立つことで、厚田中学校に恩返しをしていきたい。
（以上、西川絵梨）

4．後輩の学生からのコメント

ここでは、田中さんの授業を補佐役として支えてくれた大学二年生の長野さんによる家庭科授業への振り返りを書いてもらう。

私は田中萌々さんのサポートを行う役として家庭科の授業に参加しました。授業の準備から終わりまでの工程を手伝うという形でしたが初めて体験したくさんのことを感じ学ぶことができました。

まず事前準備において私はそこで指導案を初めて見ました。細かな授業の流れや時間配分などが書かれており一つひとつの授業は緻密に計算されてできていること、その限られた時間の中で生徒の発言や行動に対して柔軟な対応が求められるのだということを実感しました。また、田中さんは指導案のほかに、指導案のポイントとなる部分を何枚かの付箋にまとめて順に張り付けたボードを用意していました[4]。そのようにすることで時間の調整や伝え忘れを防止していて数ある工夫の中でも印象に残っています。

実際の授業で私は主に板書と機器操作、机間指導を行いました。板書や机間指導では書き順や、生徒に対する一言など小さな行動にも思っていた以上の配慮が必要で、生徒に対して積極的に声をかけられませんでした。教科の知識だけではなく言葉遣いなどの日常生活の知識も正しく身につけなければならないと感じました。

また田中さんと生徒との様子を通して、生徒は授業をする自分の姿を映す鏡でもあるのだということを学びました。緊張感や授業の内容、進行のスピードの具合によって生徒の反応がガラリと変わっていたからです。たとえば田中さんの笑顔が互いの緊張感を徐々にといていっていたこと、話すスピードや声の大きさや小話が生徒を聴く表情にさせていたこと、逆に少し難しい単語が出たり指示やアドバイスが具体的でないと生徒の表情が曇り手が止まってしまったりしていたことなどがありました。

授業後の反省会では生徒にとってわかりやすい授業とはなにかを考えさせられました。板書では他色で囲んだり注目させたりして枠組みをはっきりさせる、テスト勉強はノートを復習すればできるなどといった必ず覚えてほしいところの基準を定めることや生徒のつぶやきを拾うなどの先生方のアドバイスから、その場（授業）でわかりやすく知識を伝えることだけに集中しすぎてはいけないのだと感じました。わかりやすさにつなげるには生徒がいつでも内容を振り返られるような授業づくりが大切なのだと学びました。

将来教えるという立場になった際には生徒も私自身も授業後に楽しかったと思えるような授業をしたいです。そのために今回の学びを活かし教師になるために必要な力を身につけていきたいと思います。
（以上、長野祐果）

以上のように、大学二年生である長野さんは、この時点で模擬授業を大学内でも一度も経験したことがない。しかし、中学校での「先輩」の授業を実際にサポートすることを通して、授業を実践する上での勘所を感じ、その感覚を今回の振り返りで自らの言葉で表現できたことは、今後教職課程を履修する中で、非常に意義ある経験だといえる。

5．厚田中学校からの学習支援に対するコメント

最後に、これまで三年間、学習支援の調整役を担当した厚田中学校の中村教頭のコメントを述べていきたい[5]。まさに、厚田中学校での学習支援を定着させた立役者が中村教頭である。

・距離の問題を度外視して、厚田中学校に愛着を持ってくれた。自分の将来のことを考えて、学習支援にも真剣に取り組んでくれた。その姿勢は、生徒にも、教員にも伝わっている。
・授業内での学習支援だけではなく、餅つき大会など、保護者や地域との関わりを持ってくれた。また、宿泊の際には若手の教員とも色々な話をしていた。中学校という場所をより身近に感じてくれたし、若手の教員も刺激を受けたと思う。
・学生として学習支援に参加していた西川さんが家庭科教員になってくれ、SAT の継続性を感じることができ、嬉しかった。それが継続できないのは残念だが、致し方ない。

中村教頭からのコメントには、まず何よりも学生たちの厚田中学校での学習支援への真摯な態度を評価していただいている。このように本学の教員志望の学生たちを、教育実習以外にも継続的に見守っていただいている厚田中学校の皆さんには感謝したい。ただ、家庭科の時間講師を勤めていた本稿の執筆者の一人でもある西川先生の後継者を見つけることができなかったことは、大学の教員養成の課題ともいえる。今後は、質的にも量的にも充実した家庭科教員養成を心がけていきたい。また、学習支援の教育効果の面でも、中学校側から評価いただけるよう、学生とも今後話し合いたいと考えている。

おわりに

まとめにかえて、最後に、本学で学習支援活動の調整担当である伊井が、2014 年度の厚田中学校での学習支援を振り返りたい。

第一に家庭科での授業についてである。今年度は、執筆者の一人でもある田中さんが授業を行った。そして、本報告書にも記されているとおり、本人にとっても自らの授業力を成長させるきっかけとなったと同時に、本学卒業生でもある厚田中学校の家庭科教員にとっても、また後輩の学生にとっても、授業力向上のための刺激になったといえる。その刺激は、決して、授業のテクニック面だけではなく、初めての中学生を対象とした授業を行う田中さんの熱意が大きく影響している。今後も、このような取り組みを継続していきたい。

一方で、第二に新規のイベントを企画し、実施することができなかったとの反省がある。本報告書の本文でも明確であるが、「例年どおり行った」という表現が多い。これは学生が大学内で他の新規イベント（はまなすフェスティバル）を企画・参加していたこととも関係するが、家庭科授業も含め、これまでの先輩方が築き上げてきたスケジュールをそのままにこなして来ただけともいえる。来年度以降は、少しでも当該年度の新規性が出せる工夫を学生にはしてもらいたい。

第三に、来年（2015 年）度は、厚田中学校での学習支援活動を始め五年目の節目の年となる。本稿で四報目となる報告書を含め、これまでの学習支援の「効果」を検証する必要もあろう。中学校側・大学側にとって、この学習活動にどのような意味や効果があったのかを、インタビュー調査などを通して、考察していきたいと考えている。

注

1）これまでの報告書は、以下の三報である。
伊井義人・山村健史他 6 名「藤女子大学と厚田中学校との学習支援連携：実施初年度の現状、課題そして将来的展望」『人間生活学研究』第 19 号、藤女子大学、2012 年、63～78 頁。
伊井義人・中村信次他 5 名「遠隔地小規模校での学習支援連携の定着への課題：藤女子大学と厚田中学校による 2 年間の取り組みを振り返って」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』第 8 号、2013 年、77～90 頁。
伊井義人「へき地中学校での学習支援を通して育んだ「女子大生と中学生の絆」」『フューチャースクール×地域の絆＠学びの場』（伊井義人監修）、六耀社、2014 年、119～128 頁。
2）当日参加した食物栄養学科の学生は、2015 年 4 月から函館の私立高等学校で教諭として勤務している。
3）これまでは家庭科教諭はおらず、他教科の教諭と栄養教諭が家庭科の授業を行ってきた。
4）この付箋を使う方法は、厚田中学校の家庭科教諭の西川先生が田中さんに伝え、実践していたことである。田中さんは、その後、大学の模擬授業でも付箋を指導案などに貼り付けていたことは、印象に残っている。（伊井義人）
5）中村教頭は 2015 年 4 月 1 日付で、石狩市立厚田中学校から恵庭市立恵北中学校に転任となった。

The Report on Learning Support Activities in Atsuta Junior High School for Improving Teaching Methods of Home Economics subjects of Undergraduate students

Yoshihito II
(Professor, Fuji Women's University)
Shinji NAKAMURA
(Deputy Principal, Atsuta Junior High School, Ishikari)
Eri NISHIKAWA
(Home Economics Lecturer, Atsuta Junior High School, Ishikari)
Momo TANAKA
(Undergraduate Student, Fuji Women's University)
Yuuka NAGANO
(Undergraduate Student, Fuji Women's University)

This paper aims to report on the learning support activities provided by undergraduate students of Fuji Women's University. Especially this time we plan to reflect on class lessons of Home Economics taught by our third grade student. This feedback would give us a chance to make clear the meaning of our learning support activities for both of university and junior high school.

Key words: learning support, teaching skill, Atsuta junior high school